

朝鮮半島出土の高麗・朝鮮王朝・中国陶磁：2006年 新安沈没船見学と関連陶磁器について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/3558

朝鮮半島出土の高麗・朝鮮王朝・中国陶磁

— 2006 年新安沈没船見学と関連陶磁器について —

佐々木達夫, 吉良文男, 井上喜久男, 佐々木花江, 野上建紀, 中野雄二, 小川光彦

1. はじめに

2006 年 11 月 17 日～19 日、新安沈没船引揚 30 周年記念シンポジウム（新安船発掘 30 周年記念国際学術大会 14 世紀アジアの海上交易と新安海底遺物）が韓国全羅南道木浦市の国立海洋遺物展示館で開かれた⁽¹⁾。なお、同館では「新安船と東アジア陶磁交易」という展覧会が開催されており（期間：2006 年 9 月 22 日～12 月 10 日）、新安遺物を中心に関連伝世品や中国窯址出土破片、韓国遺跡出土品、日本遺跡出土品などが陳列されていた。また 300 ページ近い大部の図録も発行され、新安遺物に関しては側面・内面・底部の写真が掲載されており、参考になる。新安沈没船から出土した高麗青磁はこれまで古い年代が与えられ、積載時すでに骨董品であったと推定されてきたが、今回の韓盛旭発表は、韓国・日本出土高麗青磁などの例を引きつつ、沈没船の年代に近い生産年代を示唆したことが興味をひいた⁽²⁾。19 日はシンポジウム最後の催しとして、船による韓国西南海岸多島海文化遺産踏査（新安海域を含む）が行われ、水中考古学を専門とする野上と小川が参加、他のメンバーは全羅南道康津郡高麗青磁事業所に併設されている博物館および国立光州博物館を訪れた。その後一同は再合流し、全羅北道益山市の弥勒寺址博物館で弥勒寺遺跡出土・収集の中国・高麗陶磁器を撮影・実測し、さらに同市の王宮里遺跡を見学した。全羅南・北道探訪のあと、京畿道竜仁市にある京畿道博物館を訪れ、同館で開催中であったオーストラリア展や平常展示を見学したほか、京畿道驪州市中岩里窯址出土の高麗青磁・白磁を見ることができた。

本稿ではこうした最新の成果や情報に触れ、弥勒寺遺跡の出土品等を紹介し、こうした出土品と関連する金沢大学蔵の康津採集高麗・朝鮮王朝陶磁器や関連陶磁器分析等を併せて紹介し、その特徴を検討する。

2. 朝鮮半島出土の高麗・朝鮮王朝陶磁器

(1) 朝鮮半島発見沈没船に伴う高麗陶磁器

シンポジウムでは金聖範が韓国の水中考古学の過去と現状と将来を総括した⁽³⁾。これまで 12 の調査地域で水中遺跡が調査され、その内、6 つの船体が引き揚げられている。水中遺跡から発見された高麗青磁に関して、新安沖沈没船ではわずか 7 点の出土にすぎないが、大量に出土する水中遺跡も少なくない。

1981～1987 年度にかけて調査が行われた忠南泰安半島近海では 14 世紀前半の高麗青磁 50 点が引き揚げられている。1983～1984 年度にかけて調査が行われた莞島漁頭里では高麗青磁を含む 30,000 点の遺物が引き揚げられている。1995～1996 年度にかけて調査が行われた務安道里浦では 14 世紀後半の高麗青磁を含む 639 点の遺物が引き揚げられている。2002～2003 年度にかけて調査が行われた群山飛雁島では 12 世紀の高麗青磁 3,178 点を含む積荷が引き揚げられている。2003～2004 年度にかけて調査された群山十二東波島では 11～12 世紀初の高麗青磁を含む 8100 点の遺物が引き揚げられている。2005 年度に調査が行われた新安安佐島では 14 世紀の高麗青磁が引き揚げられている。2004～2005 年度にかけて調査された忠南保寧元山島では完品ならば国宝級のものを含む高麗青磁片が 10,000 点引き揚げられてい

る。13世紀前半と推定されているが、従来12世紀の典型作とされていたものも含んでおり、今後議論を呼ぶものと思われる。2006年度に調査された群山夜味島では高麗青磁を含む780点が引き揚げられている。

新安沖沈没船の遺物のほとんどはソウルの国立中央博物館が所蔵しており、一部は国立光州博物館に展示されている。木浦の国立海洋遺物展示館が保管している遺物はあまり多くないが、同館の代表的なものはほぼすべて展示していると聞く。新安沖沈没船30周年を記念した特別展示「新安船沈没船と東アジアの陶磁貿易」が開催されていたので、通常の常設展とは異なると思われるが、新安沖沈没船以外の沈没船資料については、特別展示室とは別の展示室に莞島漁頭里（11世紀後半）、群山十二東波島（11～12世紀初）、群山飛雁島（12世紀）、忠南保寧元山島（13世紀前半）、務安道里浦（14世紀後半）などの高麗青磁を年代順に展示している。

（2）新安沈没船引き揚げ高麗青磁

新安沈没船出土の陶磁器は2万点ほどあるが、そのうち高麗青磁は僅かに7点である。産地は康津の高麗青磁窯跡である。韓盛旭によると、産地は康津郡大口面沙堂里と全羅北道扶安郡保安面柳川里の青磁窯であろうという。しかし、新安遺物と完全に一致する窯址出土品はまだ発見されていず、生産地から年代を限定するには至っていない。7点とも、その生産年代は13世紀後半から新安船の木簡年代である1323年の間に収まるというのが韓盛旭見解である。これに対しては、韓国人研究者の間でかなり異論があるようであったが、討論時間が少なく、なんら議論されなかったのは残念だった。とくに陰刻蓮花文梅瓶は1983年の名古屋での新安シンポジウムで12世紀説が主張されており、年代間の懸隔が大きいことが注目される。高麗青磁以外でも竜泉窯、定窯、建窯製品にアンティークか否かについて見解の相違があり、なお議論を深めなければならない点である。また、新安船内に高麗青磁が少量ながら積まれていた事実から、航路について、日本直行ではなく、韓国西南海岸を経由する船だったのではないかという推定が一部韓国側研究者から提起された。これについては直ちに賛同しがたいが、高麗青磁がいつ、どこで、どういう経緯で積載されたかという問題は残る。

（3）弥勒寺址博物館所蔵高麗青磁

弥勒寺址博物館で中国陶磁器とともに展示してある多くの高麗青磁のうち数点を紹介する（Figure 1）。いずれも高麗青磁の発生と発展に関する資料となる。

1. 高麗青磁碗（Figure 1-1）。直口玉壁底、目積み。口径16.2cm、高さ5.9cm、底径6.6cm。越窯青磁に似ている形態である。10世紀か。
2. 高麗青磁碗（Figure 1-2）。暗緑色釉がかかり、口縁部内側に1条の陰刻による圏線が入る。器形は底部が小さくやや丸みをもつ。底部は露胎で、胎土は粗い。口径17.4cm、高さ7.5cm、底径5.9cm。12世紀か。
3. 高麗青磁盤口扁瓶（Figure 1-3）。胴部の一部が平坦に成形されている。口径7.7cm、高さ23.8cm、底径8.5cm。11世紀か。
4. 高麗青磁盤口瓶（Figure 1-4）。胴部に鎬が入る。11世紀か。
5. 高麗青磁陰刻線枕（Figure 1-5）。陰刻によって蓮文、雲文が施されている。高さ10.0cm、長さ28.0cm、幅13.0cm、中央部幅10.5cm。13世紀か。

（4）金沢大学蔵高麗・朝鮮王朝陶磁器



Figure 1 弥勒寺址博物館所蔵高麗青磁

金沢大学資料館には暁烏敏が寄贈した陶磁器コレクションが753点あり、その中に朝鮮半島で出土した高麗・朝鮮王朝（李朝）・中国の陶磁器破片が43点含まれる（Figures 12～21）。すでに紹介済みであるが⁽⁴⁾、再掲載し文様や産地について新安沈没船や康津窯跡出土品と比較検討する。これらの資料は李王職庶務課長末松熊彦氏が暁烏氏に高麗陶磁標本として贈呈した品であることが、残された名刺の記載からわかる。また、別の紙には「大正四年 全羅南道康津郡大口面堂前里」と記載されることから、これらの資料の採集地・窯跡が康津であると推定できる。

43点の資料は高麗・朝鮮王朝の陶磁器と中国の白磁・青磁が混じる。高麗陶磁器は施釉前の資料も混じり、康津窯跡出土品の可能性が高い。中国陶磁器も朝鮮半島で出土したことはほぼ疑いが無く、全羅南道で出土した可能性が高いものである。当時、中国竜泉窯や景德鎮白磁が高麗陶磁器とされたことも興味深い。窯跡出土の高麗・朝鮮王朝陶磁器は産地推定の資料として利用でき、中国陶磁器は朝鮮半島から出土する中国陶磁の実体を伝える研究資料として利用できる。暁烏敏氏は大正15年末から昭和4年にかけて、インド、ヨーロッパ、朝鮮、アメリカを歴訪した。昭和3年8月末から11月初旬には朝鮮を訪れ、各地で講演をしている。しかし、金沢大学附属図書館蔵の当時の日記帳には、陶磁器に関する記述が見あたらない。資料が入っていた箱蓋に箱書きがあり、以下の記載がある。

表面「李王博物館々長・・・(人名)。朝鮮陶器標本。敏書」裏面「昭和三年九月 京城にて 末松熊彦氏より頂く 朝鮮陶器標本四十三片 敏」なお、当時の『職員録』をみると、宮内省：李王職：末松熊彦と記載がある。日本歴史大辞典編集委員会編『日本歴史大辞典』第9巻（1969, 河出書房新社）553頁に李王家の項目があり旗田巍は「・・・日韓併合（1910年）で李朝は滅亡したが、その国王一家は皇族の礼遇をうけ、前国王（李王）には王という称号が与えられ、子孫に継承することが許され、財産・歳費が与えられ、家政の処理のために李王職がおかれた。しかし日本の敗戦によって一切の称号・特典は消滅した。」と記す。

資料（KM01～45） かつこ内は陶磁器に貼られた紙に記載されていたもの。○印は金沢大学で実施した素地（胎土）分析資料。以上の資料は金沢大学資料館だよりに報告したが、素地（胎土）分析の報告は今回新たに載せたものである。観察の詳細は本論末尾に掲載した。

- | | |
|----------------------------|----------------------------|
| 1 高麗象嵌青磁碗（雲鳳紋象嵌青磁碗）○ | 2 高麗象嵌青磁碗（狂言袴筒茶碗）○ |
| 3 高麗象嵌青磁壺（雲龍紋象嵌青磁） | 4 高麗象嵌青磁碗 |
| 5 高麗象嵌青磁碗○ | 6 高麗象嵌素焼八角小鉢○ |
| 7 高麗象嵌素焼碗（菊紋象嵌青磁素焼（焼過）皿） | 8 高麗象嵌素焼碗（雲鶴紋象嵌青磁素焼碗）○ |
| 9 高麗象嵌素焼碗 | 10 高麗型紋青磁皿○ |
| 11 高麗型紋青磁皿（雲葉紋陽刻青碗） | 12 高麗型紋青磁皿 |
| 13 高麗型紋青磁碗（人形手陽刻青磁碗） | 14 高麗型紋素焼碗（唐草陽刻青磁素焼碗（焼過））○ |
| 15 高麗刻線文青磁瓶（蓮花彫刻瓶） | 16 高麗刻線文青磁皿（雲鳳紋陰刻青磁碗） |
| 17 高麗刻線文青磁碗○ | 18 高麗刻線文青磁鉢 |
| 19 高麗刻線文青磁碗？ | 20 高麗刻線文青磁皿（蓮花彫刻青磁窯変碗） |
| 21 高麗刻線文素焼枕（雲葉紋青磁素焼（適度）枕）○ | 22 高麗無文青磁碗（無地青磁碗）○ |
| 23 高麗無文青磁碗○ | 24 高麗無文青磁皿（無地青磁皿） |
| 25 高麗鉄絵青磁瓶（繪高麗瓶）○ | 26 朝鮮王朝象嵌皿（高靈郡三島曆手皿） |
| 27 朝鮮王朝象嵌皿○ | 28 朝鮮王朝象嵌皿（花三（島）□） |
| 29 朝鮮王朝象嵌碗 | 30 朝鮮王朝象嵌碗 |
| 31 朝鮮王朝象嵌碗 | 32 朝鮮王朝象嵌碗（花三嶋（窯変）碗） |
| 33 朝鮮王朝鉄絵壺○ | 34 高麗陰刻上鉄絵壺 |

- 35 朝鮮王朝鉄絵壺
- 37 中国青磁碗
- 39 中国青磁碗
- 41 中国白磁碗
- 43 黒釉瓶
- 45 中国白磁碗

- 36 中国青磁碗
- 38 中国青磁碗
- 40 中国青磁碗
- 42 黒釉瓶
- 44 内面青磁外面黒釉碗

3. 金沢大学蔵高麗／朝鮮王朝陶磁片（KM 34 高麗／朝鮮王朝象嵌文破片）について

金沢大学蔵の高麗陶磁片（KM 34 高麗象嵌文破片 Figures 2, 13, 21-KM34）は黒象嵌が施された小破片で、表裏の上層が灰色、内部が褐色味を呈して硬質に焼きしまっている。内面の下方に轆轤目があり、外面は丁寧な仕上げ整形が施されて滑らかである。内面の轆轤目から腰部の破片と推定され、口部が小さく絞られた瓶状の器形になるものと考えられる。表面の黒象嵌は下部に斜行線文帯が巡り、その上部に牡丹唐草状の葉文が施され、内外両面に透明釉が掛けられて茶褐色混じりの灰黒色に呈色している。素地の上には白化粧は認められない。

胎土は鉄分を含んで硬質に焼き締まっているが白磁胎には焼き上がらず、灰褐色を呈している。製作意識は白磁象嵌を目指しているものと考えられるが、原料土の選定はまだままだの状態である。

高麗時代の製作技法から見れば、青磁白黒象嵌文から展開したもので黒象嵌部分とも考えられるが、小破片であることから白象嵌文が存在するかどうかは判らない。白象嵌文のみの作品は知られているが、黒象嵌文のみの作品となれば珍しいものである。破片の胎土・釉薬の状態から見て、青磁象嵌文とは異なり、上釉としてやや白色味の透明釉を掛けただけであり、粉青沙器に近いものである。青磁様の素地に白化粧が施されないまま鉄象嵌が施された状態のもので、象嵌文ではあるが筆描き鉄絵に近い雰囲気になっており、青磁象嵌文の終末形態を示しているものと考えられる。

最近、日本陶磁の瀬戸鶯窯で、この高麗陶磁の主要技法である象嵌技法に類似する象嵌鉄彩が確認されたので紹介し、高麗陶磁との関連性について見てみたい。

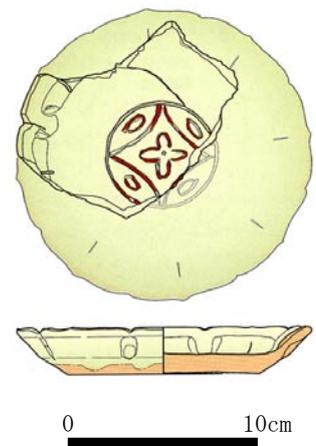
愛知県瀬戸市鶯窯は東海環状自動車道建設のために平成 11 年 1 月から平成 14 年 3 月までの 3 次に渡っ



Figure 2 KM34 高麗象嵌文破片断面



Figure 3 灰釉七宝文八稜皿（瀬戸市・鶯窯出土）



て発掘調査が行われ、象嵌鉄彩が施された灰釉七宝文八稜皿が出土した。この皿は高さ 2.5 cm、口径 15.6 cm、底径 10.2 cm を計り、内面底部に七宝文が線刻されている (Figure 3)。八稜皿は 14 世紀末以降の瀬戸窯の焼成器種の一つであり、通有の器種である。口縁部を僅かに外反させ、稜形に切り込みが入られ、その外側から押圧して内側へ隆起させて輪花となっている。

八稜皿の編年は口縁部が外反するものから折縁になって稜形の切り込みが入るように展開し、本品は押圧を伴う輪花手法が施された古式の形態を示している。内面底部中央の七宝文様は、線刻に沿って鉄彩が施され、さらに上釉として灰釉が底面を残して掛けられ、線刻の溝は埋まっていないが釉下彩の鉄絵となっている。一種の象嵌文様である。

日本陶磁における下絵付の鉄絵の初源は 16 世紀末期の絵志野と考えられてきたが、本品が確認されたことから 14 世紀末～15 世紀初めの室町時代にまで遡ることが確実となった。これらの灰釉下絵付の鉄絵については、以前から加藤清之氏より瀬戸市赤津地区の畑ヶ平窯出土の陶片で確認され、加藤唐九郎氏も下絵付として認めていることが伝えられていたが、これまで窯跡の採集品であることから類品の確認が待たれていたものである。鶯窯の発掘調査により下絵付の鉄絵技法が確認されたことにより、瀬戸窯における象嵌技法は独自の創成なのか、瀬戸窯以外からの技法の導入があったのかが問題となるところである。

瀬戸窯の施釉陶器生産は鎌倉時代から始まり、南北朝時代から 15 世紀代の室町時代前期までの製作技術の展開過程からみると、特に中国陶磁の影響が強く、それ以外にわずかに高麗陶磁の影響も指摘されている。本品は初源と推定される七宝文八稜皿であり、これまで存在していない釉下彩の象嵌鉄彩を伴うもので、瀬戸窯における施釉陶器生産の歴史の中で、この技法が創作されたものとは考え難く、日本国外からの製作技法の影響があるものと考えざるを得ないところである。瀬戸窯は鎌倉・室町時代の焼成器種の展開をみていくと時代の貿易陶磁が色濃く影響していることが確認でき、特に中国陶磁の影響を強く受けている。そうしたことから中国陶磁の影響を考えると、象嵌技法は元・明時代の陶磁には認められず、中国陶磁に圧倒されてあまり注目されていない韓国陶磁に類似品を見ることができる。

高麗陶磁にみる装飾技法をみていくと、11 世紀から白磁・青磁に鉄絵が登場し、12 世紀には陰刻文および象嵌文が加わり、白黒象嵌文が大きく発達して展開し、14 世紀末に衰退して 15 世紀以降の粉青沙器へと続いている。

瀬戸灰釉象嵌鉄彩七宝文は朝鮮時代の白磁鉄象嵌文と類似性が高く、両者の技法に関連性があるか否かが問題となる。朝鮮時代の白磁象嵌文は 15 世紀の年代観で捉えられており、現状では瀬戸鶯窯の年代観がやや古く、朝鮮陶磁の影響とは考えられなくなり、瀬戸窯の創作技法であることになってしまうが、高麗から朝鮮王朝陶磁の編年観は研究途上の感があり、結論付けることは早計である。

本品は高麗時代の青磁象嵌文から朝鮮王朝時代の粉青沙器へ展開する過渡期の形態のものと推定されるが、現在の韓国陶磁研究ではそれらの編年問題が未解決である。さらなる類似品の探求と類似の鉄象嵌技法を持つ焼成窯の発見が究明の契機となるものと考えられる。

韓国陶磁は中国陶磁と並んで日本陶磁との交流関係があったものと推定されるが、これまで両者の関係についてあまり研究されてこなかった。室町時代の鶯窯から灰釉象嵌鉄彩七宝文八稜皿が出土し、従前の畑ヶ平窯出土の再確認ができたことから象嵌鉄彩文のルーツ探しの一環で韓国陶磁資料を探していたところである。鶯窯の年代は 14 世紀末から 15 世紀初めに比定されており、韓国・白磁鉄象嵌文が 15 世紀前半代が考えられていることから両者はほぼ同時代に存在した技法ということが出来る。本品は高麗青磁の象嵌文から朝鮮時代の白磁象嵌文への製作技法の展開過程および韓国陶磁編年研究資料として重要である。

4. 高麗青磁の起源論争

高麗青磁は中国越窯の影響で始まることはほぼ確実だが、その時代については日韓で9世紀前半説から10世紀後半説に至る多様な見解があり、依然として定説としようほどの年代観に関する意見の一致はみえていない。しかし、以前より尹龍二により主張され、また近年、尹龍二説とは論拠を別にしつつも李鍾玟らによって提唱されている10世紀起源説は、より実態に近いのではないかと考えられる。起源に関する年代観は、当然その後の編年観を左右する要素となるが、10世紀起源説は、11世紀中葉以後の遺跡において主として発見される日本出土の高麗青磁の年代との整合性に関しても大きなズレを生じない。実は上記の忠南保寧元山島で発見された青磁の中には従来12世紀の典型作と見なされてきた一群の象形的な作品が含まれており、今後さらなる研究が必要である。先の韓盛旭による梅瓶の位置づけにも、最も優れた高麗青磁を産した時代とされる12世紀の作品群とはいかなるものかという問題が内包されていることはいうまでもない。

5. 全羅南道・康津の高麗青磁窯について

今回の韓国行の中で、11月19日に3基の高麗青磁窯を実見した。この内の2基は、全羅南道康津郡大口面沙堂里の康津青磁資料博物館、残る1基は全羅南道光州広域市の国立光州博物館に所在し、それぞれの屋外展示施設において公開されている。ここでは、実見した3基の窯跡の特徴及び所見等について、現地案内板による説明を援用しつつまとめてみたい。他の章で詳述されている高麗青磁の理解を深める上で一助にしていいただければ幸いである。

(1) 康津・龍雲里10-4号窯跡 (Figures 4・5)

康津青磁資料博物館展示。もともとは同じ康津郡大口面の龍雲里に存在していた窯跡であるが、1980年代、貯水池築造に伴い水没することになり、国立中央博物館により発掘調査、その後、当博物館内に移築・復元された。窯構造は半地下式の龍窯で、床面は無段、隔壁は伴わない。現存長は約740cm、幅は約120cmである。床面は焚き口から13°の傾斜角度で登り、床面上には、22個の円筒形サヤ(匣鉢)が残されていた。なお、案内板に記述は無かったものの、実見した限りでは、円筒形サヤの下に、傾斜を持つ床面上でサヤを水平に据えるための道具、馬蹄形トチン(ハマ)が敷かれているように見えた。側壁は、サヤと耐火粘土により40～50cmの厚みで構築され、肥前の連房式登窯とは異なり、床面からほぼ直に



Figure 4 康津・龍雲里10-4号窯跡



Figure 5 康津・龍雲里10-4号窯跡

立ち上がっている。焚き口については、上部は欠損しているが、円筒形ハマを積み重ねアーチを作っていたと推定されている。また、焚き口の下側に石がはまっており、この石については、説明によれば焚き口を上下に区画するものとされている。だが、これは、窯焚きの際に焚き口を塞いでいた石である可能性も考えておく必要があるだろう。焚き口の前方には1×2 m程の平らな作業スペースが設けられ、その周囲は自然石及びサヤ等で段が構築されている。焚き口左側には、平らな板石等で組まれた石室が設けられていた。この機能等については説明されていないが、発掘当時には石室内部に炭と白い粉末が残されていたとのことである。石室内のスペースは狭く、素焼きなどの焼成や薪などの貯蔵・乾燥に係わるものとは考えにくい。いわゆる「火の神様」をまつた祠のようなものであろうか。この窯の操業年代については、多様な施文技法による洗練された青磁が出土していることから、10世紀後半～12世紀と想定されている。

(2) 康津・沙堂里 41号窯跡 (Figures 6・7)

康津青磁資料博物館展示。移築された龍雲里 10-4号窯跡とは異なり、この場所(沙堂里)で1968年に発見された。1970年代には国立中央博物館によって発掘調査され、その結果、窯壁を中心に5回にわたり改修・補修を受けていたことが確認されている。この5段階の窯(「第1～5次窯壁」)は、基本的にはいずれも半地下式の龍窯であり、床面は無段で隔壁を伴わないものの、案内板掲載の実測図から、



Figure 6 康津・沙堂里 41号窯跡



Figure 7 康津・沙堂里 41号窯跡



Figure 8 龍雲里 10-1号窯跡



Figure 9 龍雲里 10-1号窯跡

第1・2次窯壁段階と第3～5次窯壁段階では全長・幅及び平面プラン等に差異があることが分かる。前者の全長は、後者に比べ明らかに長く、また、平面プラン、とくに焚き口に近い側壁については、前者は後者に比べふくらみが顕著である。最大現存長（第1次窯壁）は約800 cm、幅は112～151 cmを測る。床面の傾斜角度は20°。側壁はサヤ等の窯道具並びに耐火粘土で構築されていた。なお、説明では、側壁残存高（80 cm）を根拠に、床面から天井までの窯の高さを110 cm程度と推測している。焚き口前方には龍雲里10－4号窯で見たような明確な段や石室は確認出来ないが、焚き口前方右側に径100 cm程の掘り込みが見られる。この点は、本窯の構造上の特異な点として指摘されている。窯本体周囲の露出した土層には、物原とおぼしきサヤを中心とした窯道具の厚い堆積が認められる。これについては説明が無く、本窯の1次的な物原堆積層と捉えて良いか判然としない。操業年代については、出土青磁が「純青磁」と「象嵌青磁」など国宝級のものであることから、高麗青磁の絶頂期である12世紀と推定されている。

(3) 康津・龍雲里10－1号窯跡 (Figures 8・9)

国立光州博物館展示。全羅南道康津郡大口面龍雲里から移築・復元された窯跡である。窯構造は半地下式の龍窯。床面は無段、隔壁を伴わない。窯壁構築材をはじめ、焚き口のつくり、作業スペース、段、石室の存在など、前出の龍雲里10－4号窯跡と極めて類似している。残存状況は非常に良好であり、とくに焚き口周辺は天井部を含めて遺存していた。説明によれば、この窯は高麗時代前期に運営され、初期青磁が製作されたという。

6. 高麗龍雲里窯・沙堂里窯、越窯・竜泉窯陶磁器の素地比較

高麗青磁の素地を観察及び中国青磁と比較するため、薄片資料を作製して顕微鏡による観察及び鉍物数と大きさを研究したことがある⁽⁵⁾。分析資料は高麗美術館の金巴望氏が採集した窯跡資料9片である。資料、素地成分表、資料観察表などを再掲載する (Figures 22～27)。

- JLK1 越州上林湖窯跡 青磁合子蓋、灰色素地。1997年12月採集品。
- JLK2 越州上林湖窯跡 青磁碗、灰色素地。1997年12月採集品。
- JRK1 越州寺竜口窯跡、青磁内劃花文碗、灰色素地、1999年11月8日採集品。
- JRK2 越州寺竜口窯跡、青磁碗、淡灰色素地、1999年11月8日採集品。
- RYU1 竜泉大窯窯跡 青磁内劃花文外蓮弁文碗、淡灰色素地、採集品。
- RWR1, 2 高麗龍雲里窯26号窯跡青磁碗2片、1994年3月採集品。
- SDR1 高麗沙堂里窯31号窯跡青磁皿1片、1994年3月採集品。
- SDR2 高麗沙堂里窯3号窯跡青磁鉢1片、1994年3月採集品。

画像処理した薄片写真の線画図及び鉍物、粘土基質、空隙（孔）の容量比をそれぞれの図に示した。素地に含まれる鉍物の粗粒と細粒及び空隙の状態を観察すると、次のようなことがわかる。

高麗青磁と中国青磁はそれぞれ別グループに分かれる。高麗青磁は鉍物の粒子が粗く、中国青磁は鉍物粒子が細粒である。また、空隙も高麗青磁グループが粗い。こうした特徴は高麗青磁の肌触りを形成している要素である。中国青磁は竜泉窯青磁にやや粗い鉍物粒子が見えるが、越窯青磁には粗い粒子はない。

龍雲里窯跡出土品は2点を分析した。ところが、RWR1とRWR2の鉍物粒子は粗く均質に分布していて類似するが、空隙の状態はまったく違う。RWR1の素地にはほとんど空隙が見えないが、RWR2の素地には異常に見えるほど空隙が多い。同じ産地なのかと疑うほどの違いがある。ともに同様の焼成状態なので、粘土状態の違いを反映しているに違いない。粘土の練り方の問題に帰するかもしれない。

沙堂里窯跡出土品も2点を分析した。竜雲里窯跡ほどではないが、これも鉱物粒子が粗く均質に分布しているが、空隙の量はやや異なる。素地作成の粗さをこれも示しているようである。

高麗、中国のいずれの素地も主に石英の粒子を含み、全体に小さく不規則な形をした不透明物質が散らばっている。鉱物や不透明物質の詳細な同定は、分析資料数の増加を待って検討する今後の課題である。

7. 朝鮮半島出土の中国陶磁器

朝鮮遺跡出土の中国陶磁器はその概要が展示され図録に紹介されている⁽⁶⁾。朝鮮半島では北朝・南朝の陶磁器が出土しており、日本では唐代からであるのに比べてやや古くから発見される。金沢大学資料館蔵品 (Figures 28, 29) は竜泉窯青磁碗が主であるが、こうした一般的な製品は展示図録に見られない。

益山弥勒寺出土の中国陶磁器は展示図録に写真が掲載されているが (図 69 唐白磁碗 2 点、70 唐白磁碗 1 点、81～82 北宋白磁碗 2 点、84～86 北宋白磁碗 3 点、88 北宋白磁碗 1 点、92 北宋白磁碗 1 点、北宋白磁皿 4 点、101 北宋青白磁皿 1 点)、実測図は他の陶磁器も含めて展示図録に見られないため、作製した実測図を掲載する (Figure 10)。

弥勒寺境内から出土及び採集された中国陶磁器 7 点を紹介する。1. 白磁碗、玉縁壁底、釉はやや白濁しており、細かい貫入が入る。気孔が多いため、やや不透明で、薄くオリーブ色がかかる。底部は無釉であり、露胎部は乳白色を呈する。邢窯か、9 世紀後半から 10 世紀初め。2. 白磁碗、輪高台、「官」の刻文字外底中央にあり。器壁は薄く、焼成も良好である。畳付のみ無釉。定窯か、10 世紀。

3. 青磁碗、直口壁底、5 弁花、5 稜線、外面が窪み、内面が突出する。ゆがみ大きい。底部も施釉されているが、底部外側脇は釉葉が剥けている。9-10 世紀、越窯。申告品 (発掘品ではない) は 4 点あり、白磁碗 1 点、白磁皿 3 点。4. 白磁碗、高い高台をもち、腰はあまり張らずに口縁部が外側にやや広がる。底部内無釉、細かい貫入が入る。北宋 10 世紀後半、景德鎮。5～7. 白磁皿、同じ型式の輪花皿 3 点が展示中である。白濁釉がかかり、底部は露胎で黄橙色を呈し、高台はつかない。北宋、景德鎮。

なお、王宮里の資料展示館 (国立扶余文化財研究所王宮里址発掘調査事務所) に中国北朝青磁大瓶貼花文の破片 3 点が展示されている。上記の展示図録に掲載済みである。

8. 研究成果について

木浦のシンポジウム参加前に訪問した韓国国立中央博物館、国立光州博物館、国立海洋遺物展示館の 3 館に展示されている新安遺物を見学した。現在の展示は全遺物の一部を構成するものに過ぎないが、典型的な引揚げ品の概要は把握することができた。また、シンポジウムで韓国のみならずフランス、イギリス、日本などの水中考古学の現状を理解することができたのも収穫だった。ただ、新安遺物研究に関しては、今回の対象が陶磁器であったため金属器や漆器その他に関しては発表がなく、今後の課題として積み残されている。

各地で高麗青磁を中心に朝鮮半島の陶磁伝統を幅広く見ることができた。康津郡高麗青磁事業所や国立光州博物館では保存されている高麗青磁の窯体を実見した。金沢大学にある康津窯跡出土の高麗や朝鮮王朝の陶磁器を中心に比較資料を提示し、一部の資料は偏光顕微鏡観察の結果を示し、高麗・朝鮮王朝の陶磁器を理解する一助とした。

益山では韓国における北朝から宋にかけての中国陶磁器流入の様を垣間見ることができた。中国陶磁を出土した韓国遺跡としては、ソウル風納土城・夢村土城・石村洞、原州法泉里、天安花城里・竜院里、公州武寧王陵・水村里、扶余扶蘇山城、保寧聖住寺址、将島清海鎮、釜山福泉洞、慶州雁鴨池・皇竜寺址その他、安城奉業寺址などかなり多くの遺跡が知られている。新安船と近似する中国陶磁を出土した

遺跡としても扶余王興寺址、安城梅山里、牙山温陽洞などが判明している。昭和初年に日本に入り金沢大学資料館に保管されている朝鮮半島出土の中国陶磁器も、研究史上においては資料的価値があるため、再度検討を行った。今後こうした新安のみならず日・韓・中の貿易陶磁史に関する比較研究の進展が期待される。

謝辞

お世話になった方々に感謝。鄭良謨（前国立中央博物館長）、金聖範・韓盛旭（国立海洋遺物展示館）、Cho, Eun-Jung（高麗青磁事業所）、金善基・趙相美（圓光大学校博物館）、金榮澤（全羅北道益山地区文化遺跡管理事業所）、Noh, Gi-Hwan・Kim, Seung-Dae（弥勒寺址博物館）、Kim, Yun-Jeong（龍仁大学校博物館）、李鍾宣・白種伍（京畿道博物館）、尹龍二（Myongji 大学校）、金スニ（陶芸家）の諸氏ほか、いちいちお名前を記さないが、シンポジウム組織者、参加者、各博物館の方々など多くの方々のお世話になった。

註

- (1) National Maritime Museum of Korea, 2006, "*Shinan Underwater Relics and 14th Century Asian Marine Trades*" 国立海洋遺物展示館。
- (2) 韓盛旭, 2006 「新安船出土高麗青瓷の性格」 "*Shinan Underwater Relics and 14th Century Asian Marine Trades*" 国立海洋遺物展示館, 337-349.
- (3) 金聖範, 2006, Current Situation and Perspective of Underwater Archaeology in Korea and Shinan Underwater Relics, "*Shinan Underwater Relics and 14th Century Asian Marine Trades*" 国立海洋遺物展示館, 389-421.
- (4) 佐々木達夫, 2001 「朝鮮半島出土高麗・李朝・中国の陶磁器」 『金沢大学資料館だより』 18:2-5.
- (5) 佐々木達夫, 2000 「高麗青磁の素地観察による特徴」 『高麗美術館館報』 47:2-6.
- (6) Daegu National Museum, 2004, "*Chinese Ceramics in Korean Culture*" 国立大邱博物館。

参考文献

『世界陶磁全集 18 高麗』 1978, 小学館
梨花女子大学校博物館, 1983 『扶安柳川里窯 高麗陶瓷』
海剛陶磁美術館・全羅南道康津郡, 1992 『康津の青磁窯址』
湖林博物館, 1999 『湖林博物館名品選集 I 』
円光大学校博物館・全羅北道扶安郡, 2001 『扶安柳川里 7 区域青瓷窯址群発掘調査報告書』
国立海洋遺物展示館, 2003 『務安道理浦海底遺蹟』
"Cultural History Formed by Our Clay"(『丹豪文化研究』 8), 2004, 龍仁大学校博物館



Figure 10 弥勒寺址博物館所蔵中国陶磁器

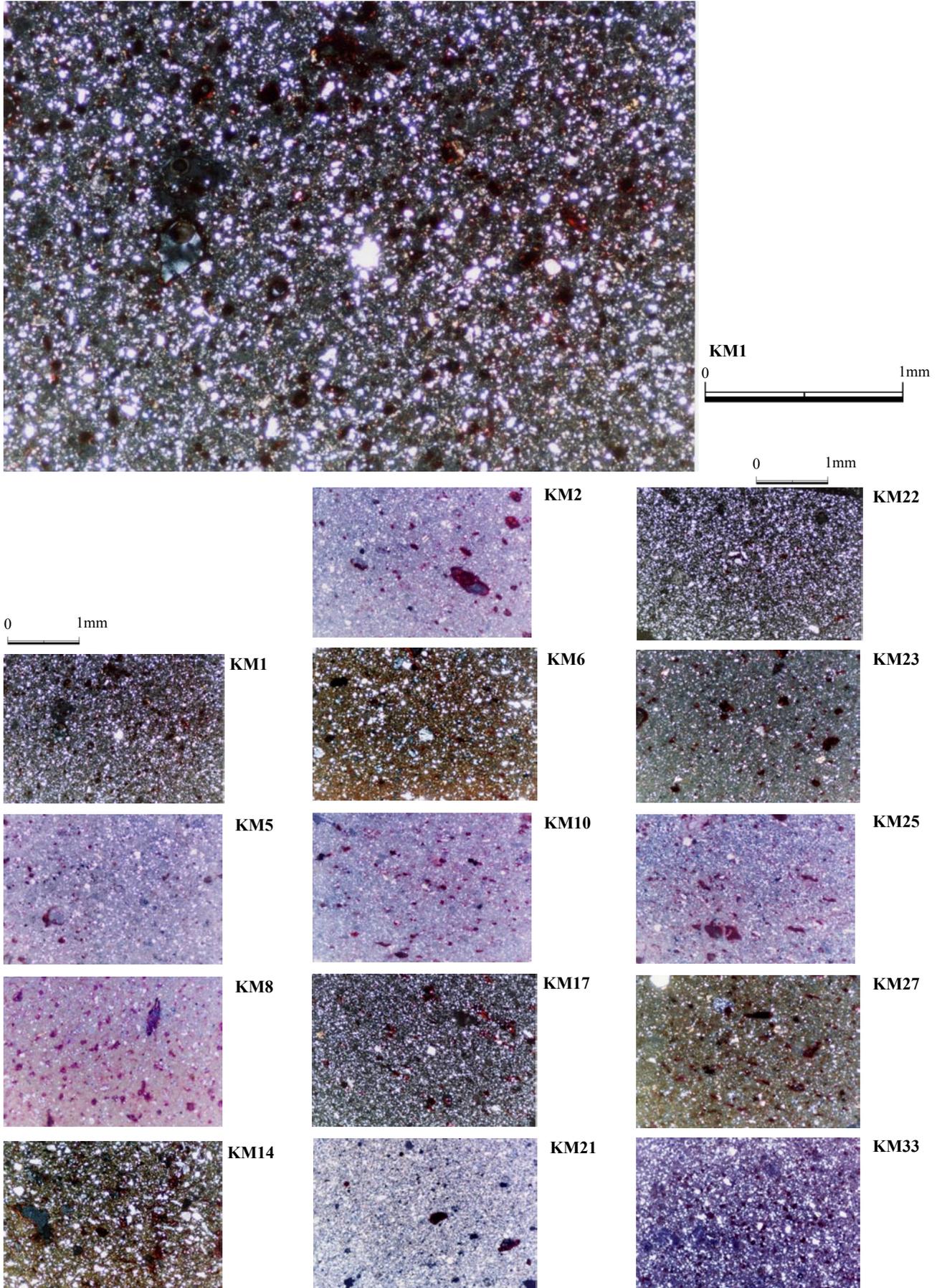


Figure 11 金沢大学資料館蔵朝鮮半島出土の高麗陶磁素地の偏光顕微鏡クロス写真

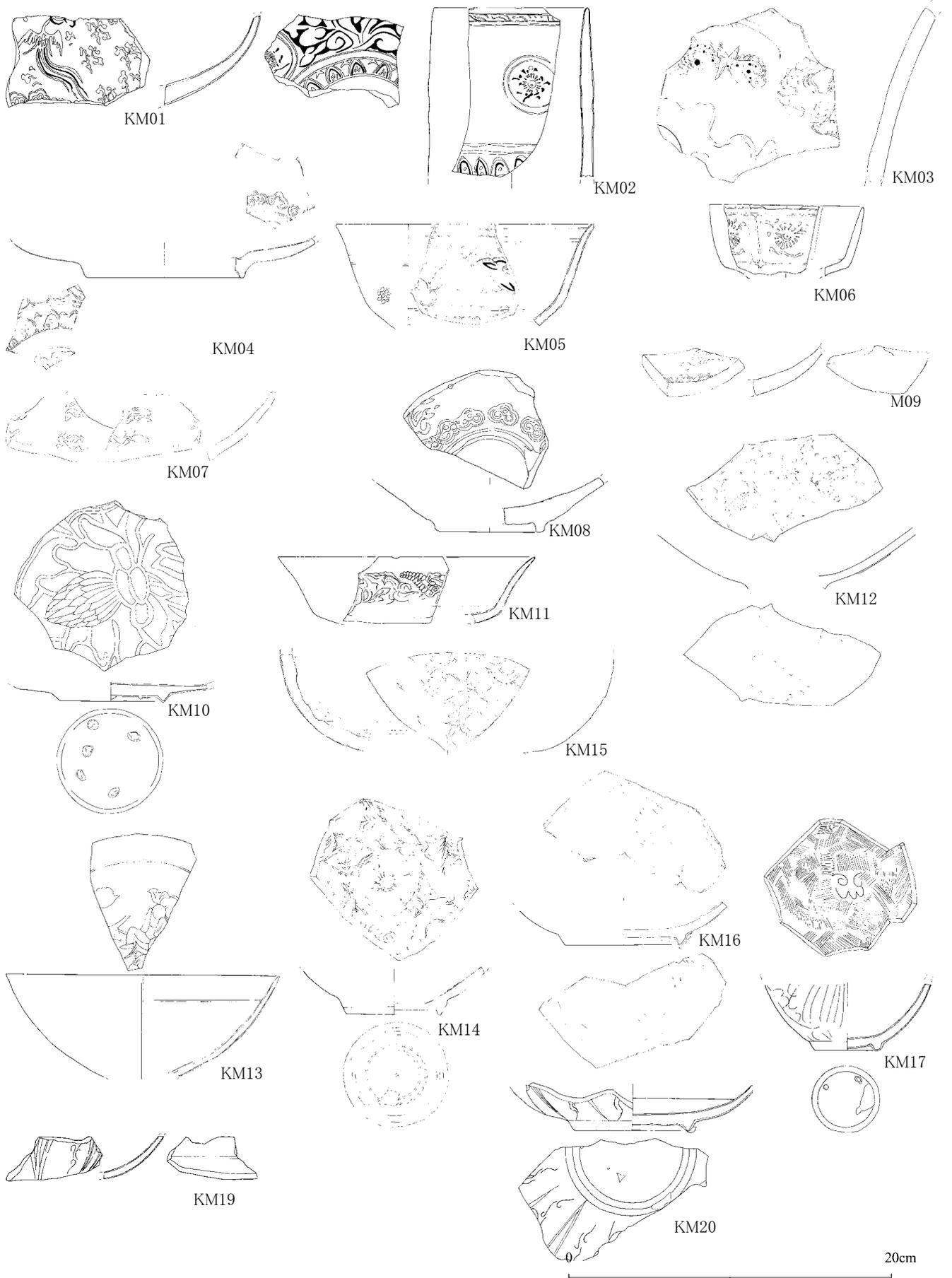


Figure 12 金沢大学資料館蔵朝鮮半島出土の高麗陶磁器

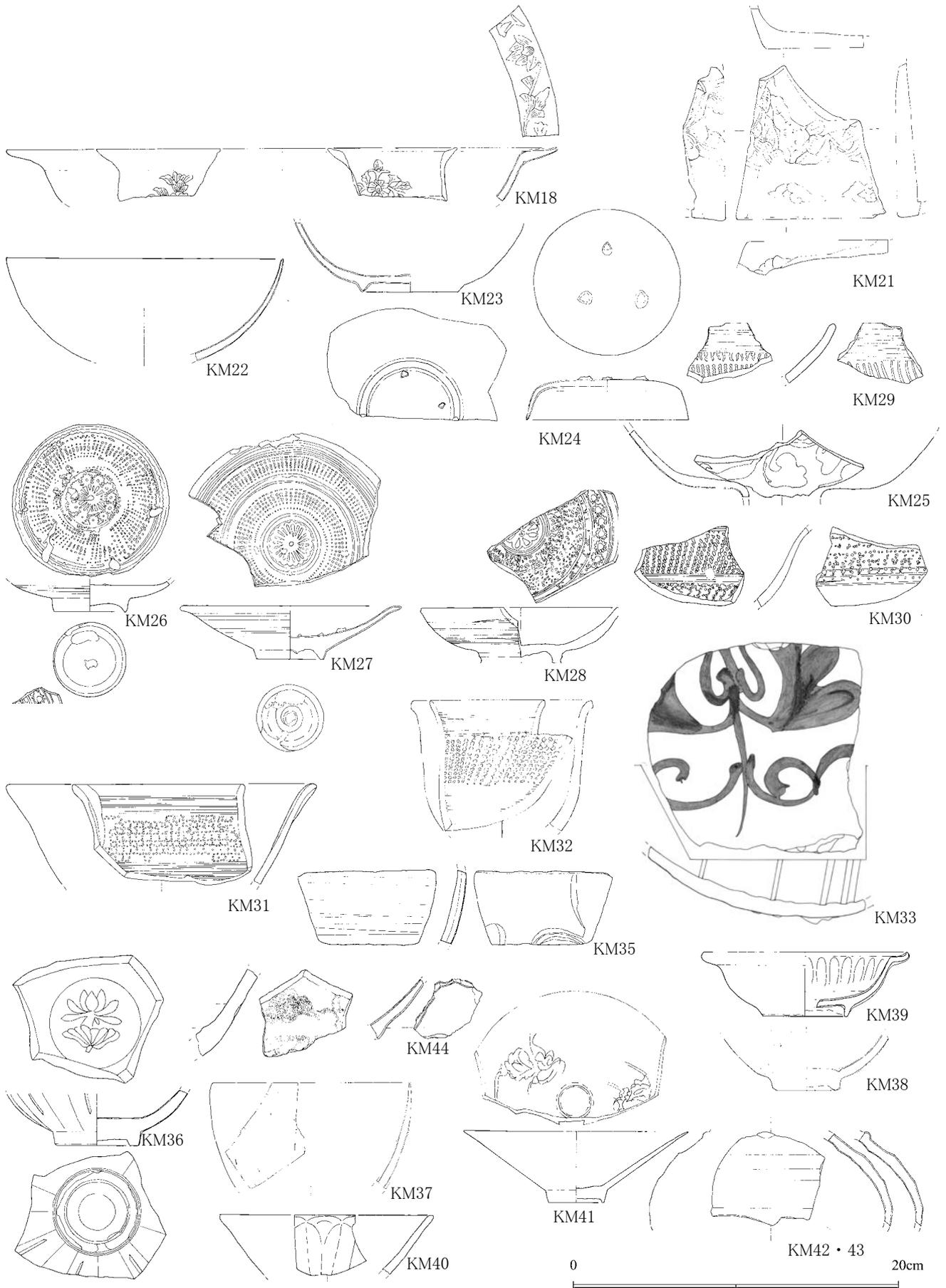


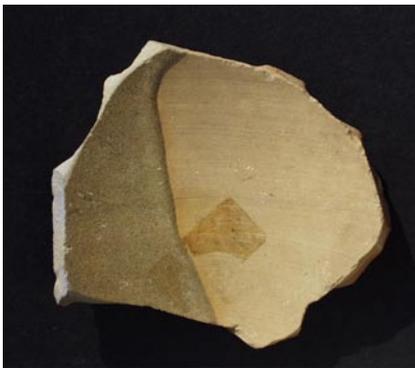
Figure 13 金沢大学資料館蔵朝鮮半島出土高麗・朝鮮王朝・中国の陶磁器



KM1



KM2



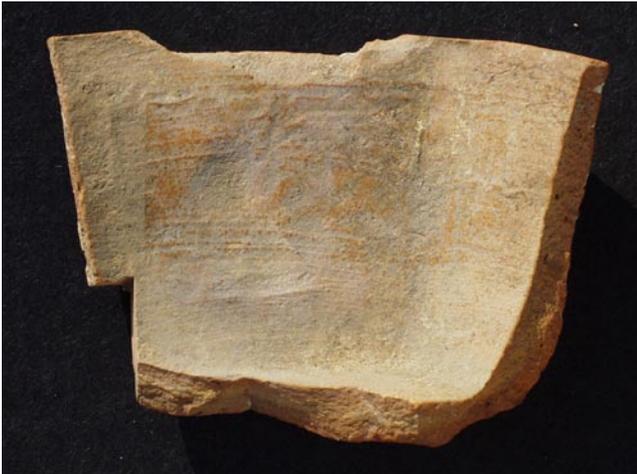
KM3



KM4

KM5

Figure 14 金沢大学資料館蔵朝鮮半島出土高麗象嵌青磁



KM6



KM7



KM8



KM9



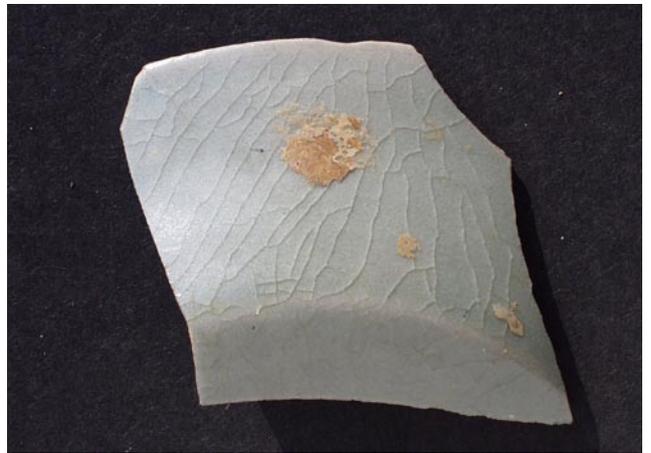
Figure 15 金沢大学資料館蔵朝鮮半島出土高麗象嵌青磁、未施釉



KM10



KM11



KM12



KM13



KM14



Figure 16 金沢大学資料館蔵朝鮮半島出土高麗型文青磁、及び未施釉品



KM15



KM16



KM17



KM18



KM19



Figure 17 金沢大学資料館蔵朝鮮半島出土高麗刻劃文青磁



KM20



KM21



KM22



KM23



KM24



Figure 18 金沢大学資料館蔵朝鮮半島出土高麗刻文・無文青磁



KM25



KM26



KM27



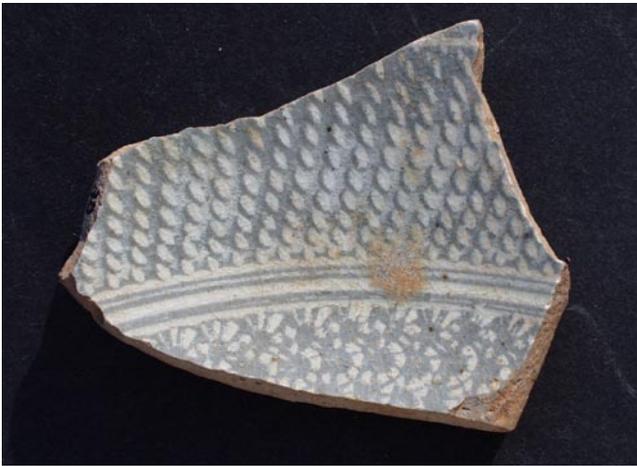
Figure 19 金沢大学資料館蔵朝鮮半島出土高麗青磁鉄絵、朝鮮王朝陶磁器



KM28



KM29



KM30



KM31



Figure 20 金沢大学資料館蔵朝鮮半島出土朝鮮王朝陶磁器



KM32



KM33

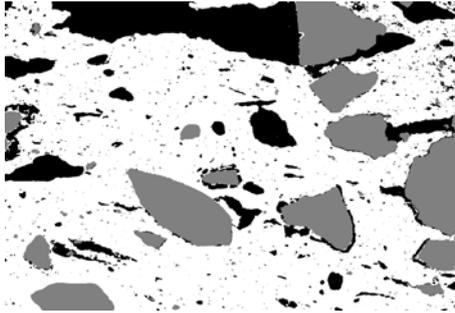


KM34

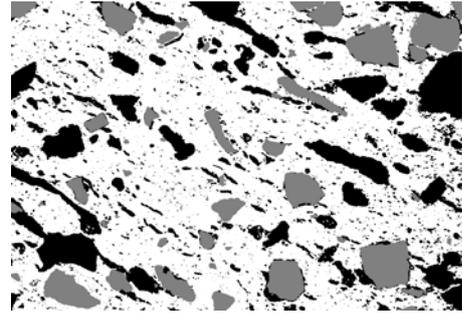


KM35

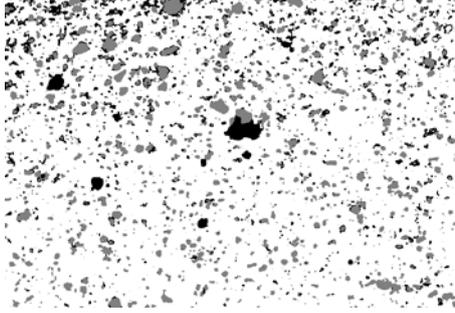
Figure 21 金沢大学資料館蔵朝鮮半島出土高麗陰刻鉄絵、朝鮮王朝陶磁器



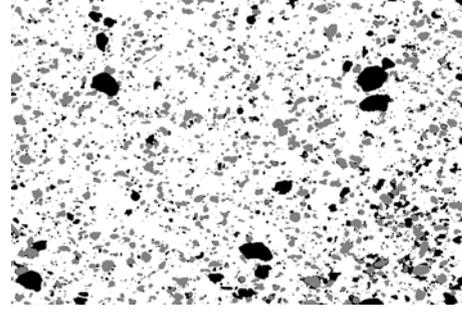
DSS1



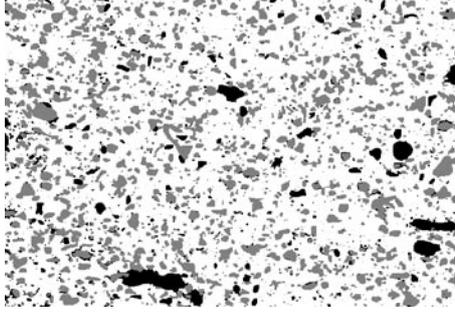
DSS2



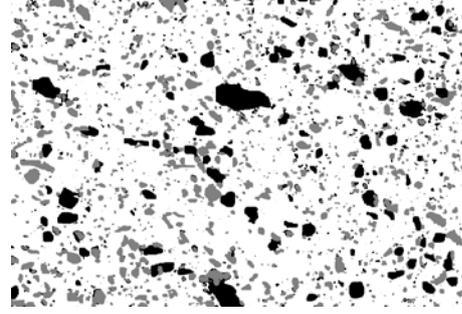
JLK1 越窰寺竜口



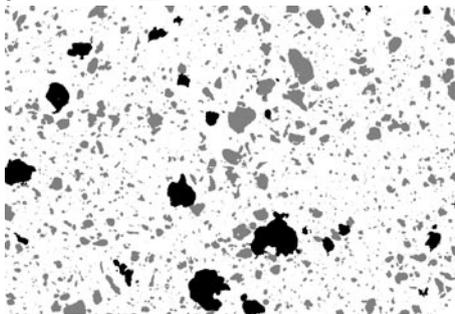
JLK2 越窰寺竜口



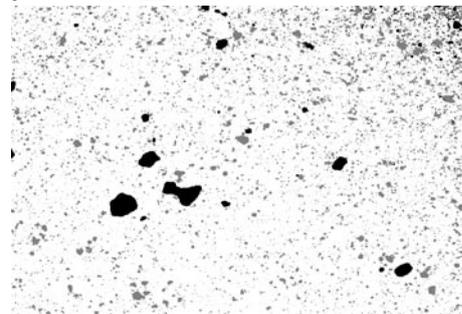
JRK1 越窰上林湖



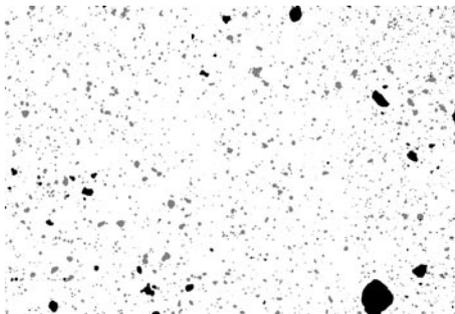
JRK2 越窰上林湖



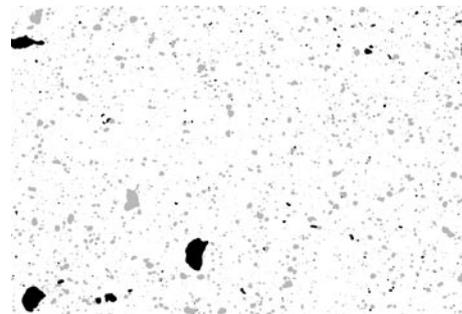
KEN1



RKUK1

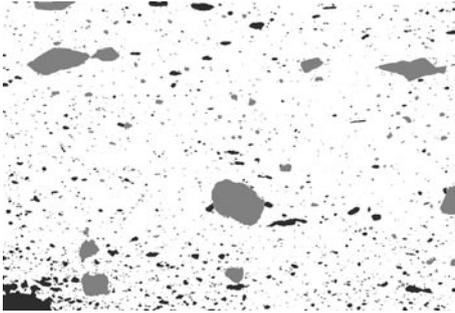


RKUK3

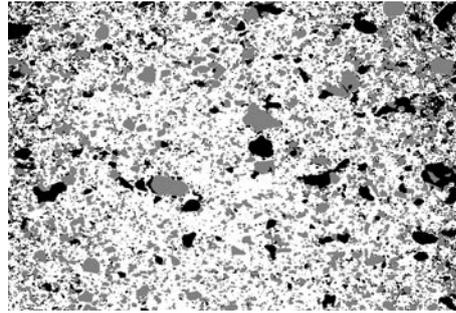


RKUK4

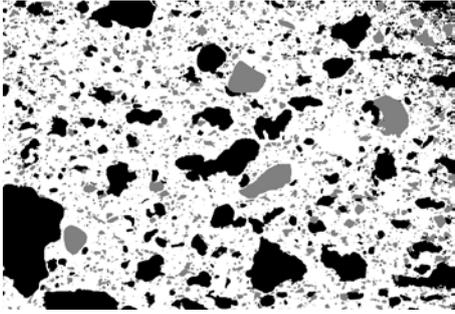
Figure 22 高麗・越・竜泉窰跡採集陶磁器素地線画



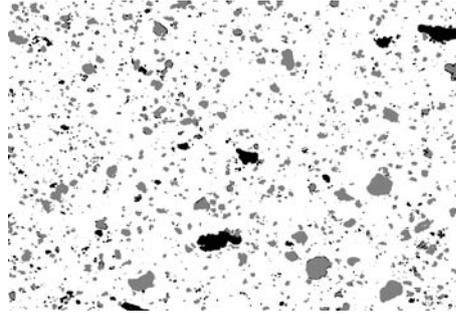
RKUK5



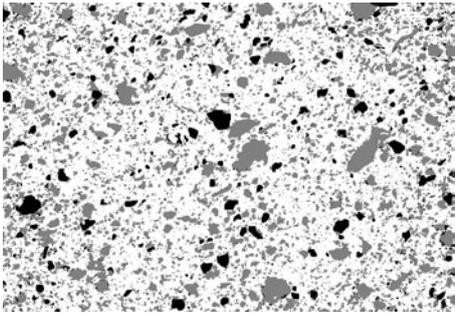
RWR1 高麗竜雲里



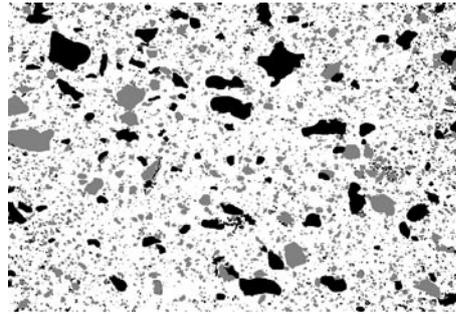
RWR2 高麗竜雲里



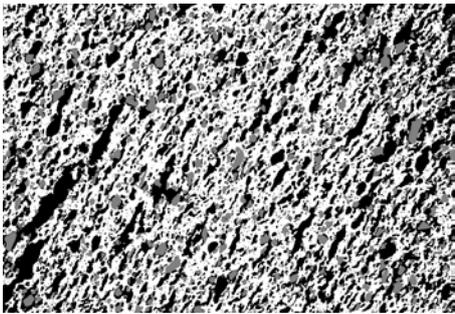
RYU1 竜泉大窯



SDR1 高麗沙堂



SDR2 高麗沙堂



SWKS1

Figure 23 高麗・越・竜泉窯跡採集陶磁器素地線画

越上林湖 (JLK)、越寺竜口 (JRK)、竜泉大窯 (RYU)、高麗龍雲里 (RWR)、高麗沙堂里 (SDR) 窯跡採集資料

No.	種類・器種	部位	大きさ (mm/cm ²)				素地	釉薬				轆轤回転		
			M.	H.	B.	C.		素地上での色	化粧	化粧土上での色	透明	貫入	成形	削
JLK1	青磁合子蓋	口一底	58	22	最大径 72		light gray 淡灰色	grayish olive green	無		透	無	左	
						備考：施釉範囲は身と接する部分を除き全面。外面に約2mm大の粘土粒が付着。内面の釉色はオリーブ灰色で外面は灰色。内面までの渦状から成形は左回転轆轤。最大径72mm								
JLK2	青磁碗	底			64		light gray 淡灰色	olive green	無		透	粗	左	
						備考：高台下面中央部窪みにへらで輪状に削った際の轆轤回転は左。幅広高台（玉璧）下面は釉拭き取りで茶褐色。高台下面2箇所焼台痕（全部で8個か）。								
JRK1	青磁碗	底			66		light bluish gray	dull yellow green	無		透	無		
						備考：輪高台。全面高台際下面に細長焼台痕が2箇所。内面に蓮花文の劃文。素地は青灰色。								
JRK2	青磁皿	底			80		light gray 淡灰色	light grayish yellow green			透	粗		
						備考：輪高台。高台際下面に細長焼台痕が2箇所。焼台痕内側に白濁した釉部分がある。								
RYU1	青磁碗	胴一底			54		light gray 淡灰色	light bluish green	無		透	粗		
						備考：輪高台。施釉範囲は高台下面内を除く。輪高台下端は施釉。高台下面の無釉部分は赤色となり、輪状の刻線1本が巡る。外面は上から蓮弁文の劃文。内面中央周囲に1本の圓刻文、内壁は楕円状劃文で4分割され、楕円形内側とその間に浅く密な櫛目文。								
RWR1	青磁碗	底			34		light gray 淡灰色	light grayish green	無		透	粗		
						備考：釉色は淡緑灰色。小さな輪高台で、高台際はへこむ。輪高台下端は釉は拭き取られ茶色。高台外側に2カ所焼台痕。								
RWR2	青磁碗	底			56		light gray 淡灰色	light grayish green	無		透	細		
						備考：幅広高台。高台下端に2箇所の焼台痕（全部で4個か）。釉色は淡緑灰色。								
SDR1	青磁皿	底			56		light gray 淡灰色	light grayish green	無		透	粗	左	
						備考：低い輪高台。全面施釉。高台下面をへらで渦状に削った轆轤回転は左。輪高台上とその外側に4箇所の焼台痕、一部は外側にはみ出す。内面中央部周辺に4箇所の焼台痕。								
SDR2	青磁鉢	底			101		light gray 淡灰色	light grayish green	無		透	粗		
						備考：輪高台。全面施釉し、高台下端の釉を拭き取る。外面釉は流れる。内面に焼台痕。								

資料	基質 (P数)	基質 (%)	空隙 (P数)	空隙 (%)	鈳物 (P数)	鈳物 (%)	合計 (P数)	総数 (P数)	再現率
RWR1	1535157	58.811	408604	15.653	666559	25.536	2610320	2610320	100
RWR2	1684916	64.548	624230	23.914	301174	11.538	2610320	2610320	100
SDR1	1770491	67.827	164430	6.299	675399	25.874	2610320	2610320	100
SDR2	1894158	72.564	326293	12.500	389869	14.936	2610320	2610320	100
RYU1	565722	86.295	22634	3.453	67211	10.252	655567	655567	100
JRK1	472927	72.248	38360	5.860	143303	21.892	654590	654590	100
JRK2	500502	76.539	60903	9.314	92515	14.148	653920	653920	100
JLK1	546930	83.733	39874	6.105	66380	10.163	653184	653184	100
JLK2	510425	77.966	57584	8.796	86669	13.238	654678	654678	100

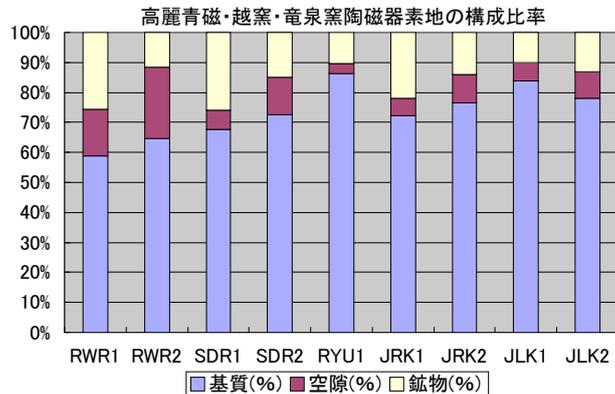


Figure 24 越窯上林湖・寺竜口、竜泉大窯、高麗龍雲里、沙堂里の素地比較

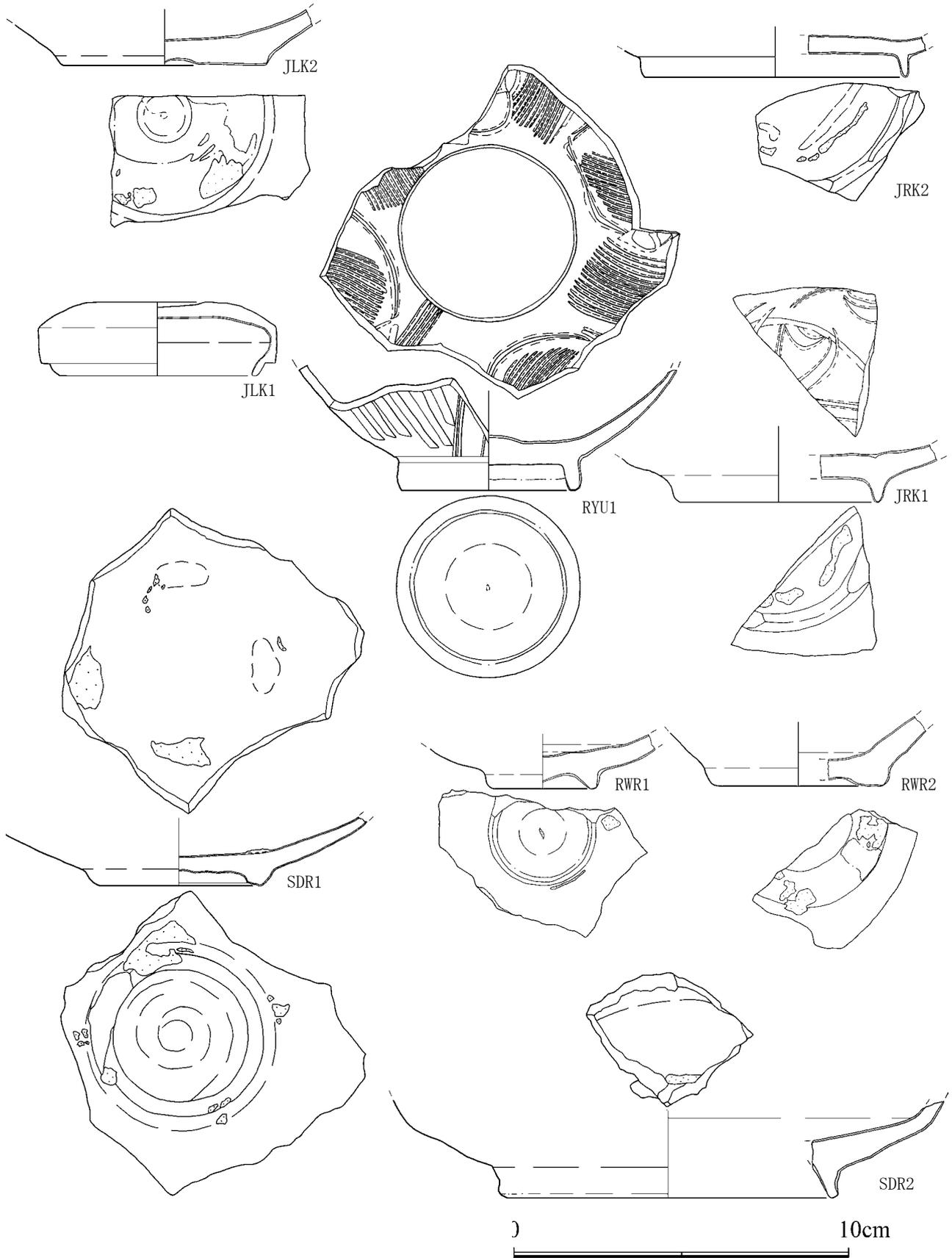


Figure 25 越上林湖 (JLK)、越寺竜口 (JRK)、竜泉大窯 (RYU)、高麗龍雲里 (RWR)、高麗沙堂里 (SDR) 窯跡出土青磁

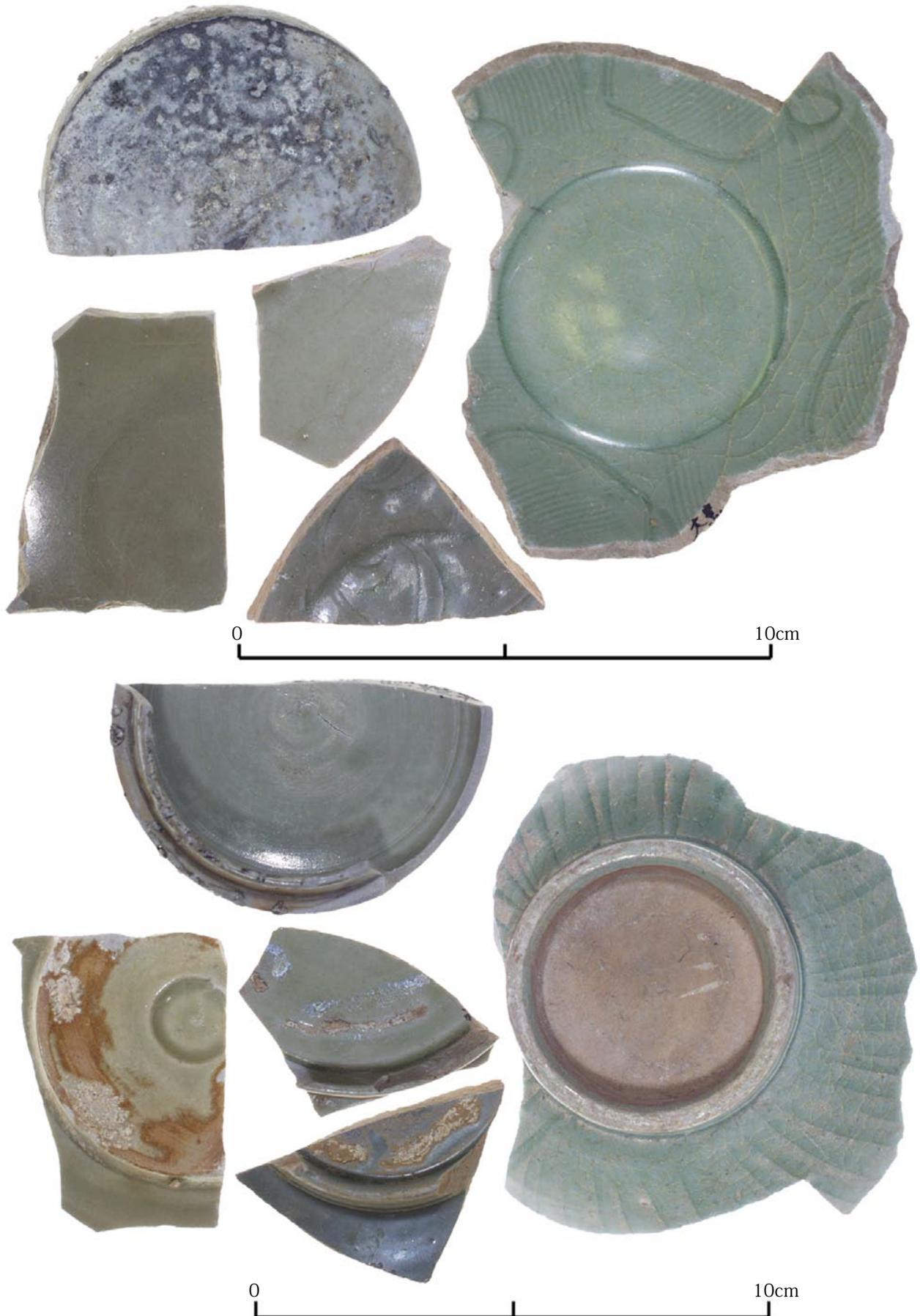


Figure 26 越上林湖 (JLK)、越寺竜口 (JRK)、竜泉大窯 (RYU)、高麗龍雲里 (RWR)、高麗沙堂里 (SDR) 窯跡出土青磁



Figure 27 越上林湖 (JLK)、越寺竜口 (JRK)、竜泉大窯 (RYU)、高麗龍雲里 (RWR)、高麗沙堂里 (SDR) 窯跡出土青磁



KM36



KM37



KM38



KM40

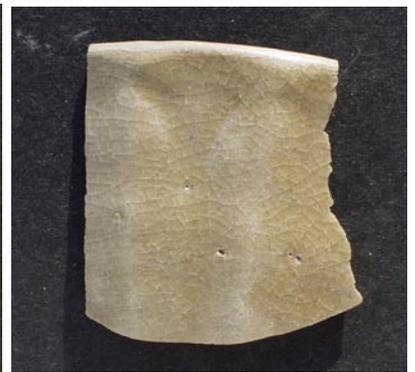


Figure 28 金沢大学資料館蔵朝鮮半島出土中国青磁



KM39



KM41



KM42・43



KM44



Figure 29 金沢大学資料館蔵朝鮮半島出土中国青磁、白磁、黒釉陶磁器

金沢大学資料館蔵朝鮮半島出土陶磁片リスト

資料 (KM01 ~ 45) かっこ内は陶磁器に貼られた紙に記載されていたもの。○印は金沢大学で実施した素地(胎土)分析資料。

KM 1 : 高麗青磁象嵌鳳凰文碗「雲鳳紋象嵌青磁碗」○

残存部位 : 体部中位

胎土 : 灰白色 (N7.5/0)。精良。黒色細粒 1%未満。空隙 1%。

成形 : 体部下位から丸味を帯びて立ち上がる。

釉調 : 明緑灰~緑灰色 (7.5GY6.5/1)。透明で内外面 2 ~ 3 mm の貫入あり、気泡少ない。

文様 : 内面は鳳凰文と雲文、外面は蓮弁文と草花文を白土と黒土で象嵌する。外面間地の唐草文は逆象嵌である。内面文様は高麗末の様相を示していると考えられる全羅南道務安郡道理浦海底遺跡出土品に類似が認められるが、外面の文様には差異がある。

焼成 : 良好。

KM 2 : 高麗青磁象嵌菊花文筒形碗「狂言袴筒茶碗」○

残存部位 : 口縁~体部下位

口径 : 9.4 cm 現存高 : 10.5 cm

胎土 : 灰白色 (N7.5/0)。精良。黒色細粒 1%未満。空隙 1%。

成形 : 直口口縁で腰部からほぼ垂直に立ち上がる。

釉調 : 明緑灰色。半透明で貫入無く、気泡多い。

文様 : 内面は無文。外面は体部下位に蓮弁文を、中位には 2 重圏線の中に菊花文を白土と黒土で象嵌する。重圏内に菊花を配する象嵌文は康津郡大口面沙堂里窯址のほか、全羅北道扶安郡保安面柳川里窯址でもよくみられる。

焼成 : 良好。

備考 : 韓国では通常「盞」に分類しているもので、日本の茶道具として伝世する「狂言袴」に先行するタイプと思われる。

KM 3 : 高麗青磁象嵌龍文壺「雲龍紋象嵌青磁」

残存部位 : 胴部

胎土 : 灰白色 (10Y7.5/1)。比較的精良。黒色細粒 1%。空隙 1%。

釉調 : 明緑灰~緑灰色 (5G6.5/1)。半透明で所々に氷裂あり、気泡多い。

文様 : 白土を中心に黒土を用いて龍文を象嵌する。

焼成 : 不良。

備考 : 内面は露胎で部分的に釉掛かりがあるが青磁色の発色は無い。

KM 4 : 高麗青磁象嵌草文碗

残存部位 : 高台~腰部

胎土 : 灰白色 (N7.5/0)。精良。黒色細粒 1%未満。空隙 1%。

成形 : 腰部は丸味を持ち、見込みに段差(鏡面)を有する。

釉調 : 明緑灰~緑灰色 (5G6.5/1)。透明で象嵌に沿って氷裂が入る。気泡は少ない。

文様 : 内面は白土の如意頭文、外面下部は白土と黒土で蓮弁文、胴部には唐草文を象嵌する。

焼成 : 良好。

KM 5 : 高麗青磁象嵌花文碗○

残存部位 : 口縁~体部下位

口径 : 16.0 cm 現存高 : 6.7 cm

胎土 : 灰白色 (N7.5/0)。良。黒色細粒 1%。空隙 2%。

成形 : 腰部は丸味を持ち、口縁部は緩やかに外反する。

釉調 : 明緑灰~緑灰色 (7.5GY6.5/1)。透明で内外面に 1 ~ 3 mm 単位の貫入、気泡はやや少ない。

文様 : 内面は白土を中心に一部黒土で草花文を、外面は白土で圏線と花文を象嵌する。文様には便化が著しく、粉青沙器に移行する要素がある。沙堂里 10 号窯址採集品などに類似した様相がみられる。

焼成 : やや不良。

KM6 : 高麗青磁象嵌菊花文素焼八角皿「菊紋象嵌青磁素焼(焼過)皿」

残存部位 : 口縁~高台際

現存高 : 4.2 cm

胎土 : にぶい橙~橙色 (5YR6/5)。良。黒色細粒 1%。空隙 2%。

成形 : 腰部で強く屈曲し、やや開きながら直線的に立ち上がる。内面は横位のナゲ痕、外面は象嵌後のカンナ削りが見られる。

文様 : 内面は無文、外面は白土で花文を象嵌。道理浦出土品、沙堂里 13 号窯址採集品などに類似品が認められる。

焼成 : 良好。

KM 7 : 高麗青磁象嵌雲鶴文素焼碗「雲鶴紋象嵌青磁素焼碗」

残存部位 : 体部下位

胎土 : 浅黄橙色 (8.75YR8/3.5)。やや粗。黒色細粒 1%。空隙 3%。

白色・透明細粒 3%。金雲母 1%。

成形 : 腰部は丸味を帯びる。外面に象嵌後のカンナ削りが見られる。

文様 : 内面は白土で雲鶴文を、外面は白土で圏線を象嵌。道理浦出土の鉢形品に酷似した文様があり、沙堂里 10 号、13 号窯址採集品に類似する。

焼成 : 比較的良好。

KM 8 : 高麗青磁象嵌草花文素焼碗○

残存部位 : 高台~体部中位

現存高：3.4 cm 高台径：5.8 cm
胎土：淡黄色 (2.5Y8/3.5)。精良。白色細粒 1%。空隙 2%。
成形：高台～外面の削りは粗雑である。見込みに段は見られない。
文様：内面は白土の圏線と如意頭文・草文、外面は白土で圏線を象嵌。やはり道理浦出土品に類似の文様構成をみることができる。
焼成：比較的良好。

KM 9：高麗青磁象嵌草花文素焼碗

残存部位：体部下位
胎土：浅黄橙～にぶい黄橙色 (10YR7.5/3)。やや粗。黒色細粒 1%。白色細粒 2%。空隙 3%。
成形：腰部は丸味を帯びる。外面の象嵌削りは粗い。
文様：内面は白土で蓮弁文と荔枝状の果実と草花文、外面は白土で圏線を象嵌。蓮弁文の形はやはり沙堂里 10 号窯址採集品に類似するが、土坡状の線上に草花を配する文様とともに広く行われたであろうものである。
焼成：良好。

KM 10：高麗青磁印花花文皿○

残存部位：高台～底部
現存高：1.1 cm 高台径：6.5 cm
胎土：灰白色 (N7.5/0)。良。黒色細粒 1%未満。空隙 3%。
成形：底部を含め器肉は薄く、現存部位では高台際から、さらに水平に広がる。
釉調：明緑灰～緑灰色 (5G6.5/1)。半透明で内外面に氷裂あり。気泡は少ない。高台内まで全面に施釉する。
文様：内面底部に型押しの花文を配す。
焼成：良好。
備考：高台内に 5 つの珪石目あり。珪石目はいわゆる翡色青磁に多くみられる技法で、型押し技法とともに、汝窯、耀州窯など中国北方窯との関連が想定される。

KM 11：高麗青磁印花牡丹唐草文皿「雲波紋朗国政碗」

残存部位：口縁～腰部
口径：16.6 cm 現存高：3.1 cm
胎土：灰白色 (N8/0)。精良。黒色細粒 1%。空隙 1%。
成形：腰部で強く屈曲し、直線的に立ち上がり、口縁部は緩やかに外反し輪花を有する。
釉調：明緑灰色。半透明で内外面に氷裂あり、気泡は少ない。
文様：内面に型押の草花文。
焼成：良好。

KM 12：高麗青磁印花唐草文皿

残存部位：高台際～体部上位

胎土：灰白色 (N8/0)。やや粗。黒色細粒 1%未満。空隙 3%。
成形：腰部は高台際から僅かに丸味を帯びる。
釉調：明オリブ灰色。半透明で内外面 3～5 mm 単位の貫入あり、気泡は少ない。
文様：内面底部はやや窪むが段差や圏線を有せず、型押しによる唐草文が広がる。外面は無文。
焼成：良好。
備考：外面の一部に砂粒が熔着。

KM 13：高麗青磁印花唐子唐草文碗「人形手明国青磁碗」

残存部位：口縁～高台際
口径：17.0 cm 現存高：6.5 cm
胎土：灰白色 (N8/0)。やや粗。黒色細粒 1%。空隙 2%。
成形：体部下位より丸味を帯びて立ち上がり、直口の口縁に輪花を有する。
釉調：青灰緑色。半透明で内外面 3～10 mm 単位の貫入あり、気泡は極少ない。
文様：内面は口縁下に一条の沈線を有し、以下は唐草中に唐子と思われる型押文あり。外面は無文。
焼成：良好。以上 KM 10～13 は釉胎とも良好で、沙堂里堂前窯出土品などに共通する優品である。

KM 14：高麗青磁印花唐草文素焼碗「唐草陽刻青磁素焼碗（焼過）」○

残存部位：高台～体部中位
現存高：3.1 cm 高台径：6.0 cm
胎土：浅黄橙色 (8.75YR8/3.5)。比較的精良。黒色細粒 1%。白色細粒 2%。空隙 1%未満。
成形：細く低い輪高台で、高台内の削りは浅い。高台際から外上方にほぼ直線的に開く。
文様：内面は型押しによる唐草文を配し、見込みの小鏡面に花文を有する。外面は無文。
焼成：良好。

KM 15：高麗青磁陰刻牡丹文瓶「蓮花彫刻瓶」

残存部位：肩部
胎土：灰白色 (N8/0)。精良。黒色細粒 1%未満。空隙 2%。
成形：肩部は丸味を帯びる。
釉調：青灰緑色。半透明で 2～5 mm 単位の貫入あり、気泡は比較的小さい。
文様：外面は片切りで輪郭取りをした中に陰刻細線で細部を表現した蓮華文を施す。
焼成：良好。
備考：内面に強いロクロ目を残す。

KM 16：高麗青磁線刻鳳凰文皿「雲鳳紋陰刻青磁碗」

残存部位：底部

現存高：2.4 cm 高台径：7.5 cm

胎土：灰白色 (N8/0)。やや粗。黒色細粒 1%未満。空隙 3%。
成形：見込み中央が緩やかに沈み、高台際からやや丸味を帯びて開く。

釉調：明灰緑色。透明で内外面に氷裂あり、気泡はやや少ない。
文様：内面底部に比較的精緻な鸚鵡文を一對線刻する。外面は無文。

焼成：良好な優品。

備考：総釉で高台内の 1 箇所小さな珪石目あり。本来 3 個あったものと思われる。

KM 17：高麗青磁線刻蓮華文碗○

残存部位：高台～体部中位

現存高：4.1 cm 高台径：4.2 cm

胎土：灰白色 (N8/0)。やや粗。黒色細粒 1%未満。空隙 2%。
成形：細く低い輪高台から、やや丸味を帯びて強く立ち上がる。

釉調：緑灰色 (7.5GY5.5/1)。透明で内外面の一部に氷裂あり、気泡はやや少ない。

文様：内面は毛彫りの線刻文、外面は蓮華文を線刻する。

焼成：良好。

備考：総釉で高台内の 3 箇所小さな珪石目あり。

KM 18：高麗青磁陰刻草花文盤

残存部位：口縁部

口径：32.9 cm 現存高：3.15 cm

胎土：灰白色 (N7.5/0)。比較的精良。黒色細粒 1%未満。空隙 1%。

成形：体部は丸味を帯びて立ち上がり、口縁部は水平に屈曲し、端部を上方に僅かに突出させる。

釉調：灰緑色。半透明で一部に氷裂あり、気泡はやや少ない。

文様：内面は口縁部平坦面に蓮華文、体部に草花文を、外面は草花文を片切りと細線で陰刻する。KM 15 に類似する施文技法で、康津郡、扶安郡の窯址に共通してみられる。

焼成：良好。

KM 19：高麗青磁陰刻鎬蓮弁文皿

残存部位：体部中位

胎土：灰白色 (N8/0)。やや粗。黒色細粒 1%。空隙 2%。

釉調：明緑灰～緑灰色 (7.5GY6.5/1)。透明で内外面 3～5 mm 単位の貫入あり、気泡はやや少ない。

焼成：良好。

文様：内面は体部中位に一条の圈線、外面は蓮弁を叉状工具で陰刻し、蓮弁には鎬を有する。

KM 20：高麗青磁陰刻鎬蓮弁文皿「蓮花彫刻青磁窯変碗」

残存部位：高台～体部下位

現存高：2.9 cm 高台径：7.3 cm

胎土：灰白色 (10Y8/1)。やや粗。黒色細粒 1%未満。空隙 2%。

釉調：オリーブ黄～灰オリーブ色 (7.5Y5.5/3)。透明で内外面 3～10 mm の貫入あり、気泡はやや少ない。

焼成：良好だがやや酸化気味。

文様：内面は体部中位に一条の圈線、外面は蓮弁を叉状工具で陰刻し、鎬も有する。

備考：総釉で高台内の 2 箇所小さな珪石目が確認される。KM19 と同一型式。

KM 21：高麗青磁陰刻唐草文素焼枕「□刻青磁素焼（適度）枕」○

残存部位：直方体枕の隅部

胎土：灰白～淡黄色 (2.5Y8/2.5)。精良。黒色細粒 1%未満。空隙 1%。

文様：端部側には雲文、中央部側には唐草の陰刻を施す。

焼成：良好。

備考：内面には布目と素地板の張り合わせ痕が見られる。

KM 22：高麗青磁無文碗「無地青磁碗」○

残存部位：口縁～体部下位

口径：18.8 cm 現存高：6.4 cm

胎土：灰白色 (N8/0)。比較的精良。黒色細粒 1%。空隙 2%。

成形：腰部から丸味を持って立ち上がり、口縁部は直口となる。

釉調：明灰緑色。半透明で内外面に 3～10 mm の貫入あり、気泡はやや少ない。

焼成：良好。

KM 23：高麗青磁無文碗○

残存部位：高台～体部中位

現存高：4.5 cm 高台径：6.0 cm

胎土：灰白色 (N8/0)。精良。黒色細粒 1%。空隙 2%。

成形：腰部から丸味を帯びて立ち上がる。内面底部に鏡面を有する。

釉調：明灰緑色。半透明で内外面の所々に氷裂あり、気泡はやや少ない。

焼成：良好。

備考：高台内の 2 箇所に小さな珪石目がみられる。

KM 24：高麗青磁無文皿「無地青磁皿」

残存部位：口縁～底部

口径：10.4 cm 器高：2.7 cm 底径：9.4 cm

胎土：灰白色 (N8/0)。比較的精良。黒色細粒 1%。空隙 2%。
成形：内外面無文で、高台を有せず、底部外面はやや丸味を帯びる。

釉調：灰緑色の総釉。透明で内外面 3～10 mm 単位の貫入あり、気泡は少ない。

焼成：良好。

備考：高台内に 3 つの小硯石目あり。これに近い器形と目をもつ皿としては高麗仁宗王（在位 1123～46）の長陵から出土したと伝えられるもの（韓国国立中央博物館蔵）が知られ、沙堂里堂前窯で類似破片が出土している。

KM 25：高麗青磁鉄絵瓶「絵高麗瓶」○

残存部位：口縁部～肩部

胎土：灰白色 (N7.5/0)。良。黒色細粒 1% 未満。空隙 3%。

成形：肩部は丸く張り、口縁部の径は小さい。その立ち上がりは極低いものと思われる。

釉調：灰緑色。半透明で内外面 3～5 mm の貫入あり、気泡はやや多い。内面の一部にも釉が流れる。

文様：釉下に鉄絵により草花文を描く。

焼成：良好。

KM 26：粉青印花連珠文皿「高靈郡三島曆手皿」

残存部位：高台～底部

現存高：2.0 cm 高台径：4.5 cm

胎土：灰白色 (N8/0)。やや粗。黒色細粒 1%。空隙 3%。

成形：高台畳付は細く尖り、平坦面を作り損じている。

釉調：灰白～オリーブ灰色 (10Y6.5/2)。半透明で内外面に 1～3 mm 単位の貫入あり、気泡はやや多い。全面施釉後に畳付より高台内面の釉を削り取る。

文様：内面は見込み中央の菊文周囲に小菊文を廻らし、圏線内を連珠文で埋める。外面腰部に多重界線を廻らす。

焼成：やや不良。

KM 27：粉青印花連珠文皿「高靈郡三島曆手皿」○

残存部位：口縁～高台

口径：13.6 cm 器高：3.4 cm 高台径：4.6 cm

胎土：黄灰色 (2.5Y5.5/1)。粗。黒色細粒 3%。空隙 3%。

成形：高台畳付は細く、幅 2～3 mm。口縁部は緩く外反する。

釉調：灰オリーブ～暗オリーブ色 (8.75Y4.5/3)。半透明で内外面 2～3 mm 単位の貫入あり、気泡は少ない。施釉後に畳付～高台内の釉を削り取り竹節高台とするが、中央部削り残しの突出部には釉が遺存する。

文様：内面は見込み中央に菊文を配し、周囲に連珠文と三重圏線、連珠文と三重圏線の配置を繰り返す。外面は体部中位に多重界線を廻らしたと思われるが、削りが雑なため刷毛目の観を呈する。

焼成：やや不良。

KM 28：粉青印花菊文皿「花見島皿」

残存部位：口縁～高台

口径：12.0 cm 器高：3.45 cm 底径：4.8 cm

胎土：灰白色 (5Y7/1)。やや粗。黒色細粒 1%。空隙 1%。

成形：高台際には一条の袈りが入り、畳付は高台内に向かって斜めに削り、畳付の外端部を尖らせる。高台内は中央部が突出し、竹節高台とする。胴部は丸味を持ち、口縁部は直口とする。

釉調：灰白～オリーブ灰色 (10Y6.5/2)。透明で内外面 1～3 mm 単位の貫入あり、気泡はやや少ない。畳付より高台内には施油しない。

文様：内面は中央に菊文を配し、体部上位に菊文帯を廻らし、間を菊文で埋める。それぞれの文様帯は二重圏線で区画する。外面には六重の界線を廻らす。

焼成：良好。

KM 29：粉青印花繩簾文皿

残存部位：口縁～体部中位

胎土：灰色 (7.5Y5.5/1)。やや粗。黒色細粒 2%。空隙 3%。

成形：胴部中位は丸味を持ち、口縁部は直口とする。

釉調：浅黄～オリーブ黄色 (7.5Y6.5/3)。半透明で内外面に 1～2 mm の貫入あり、気泡は少ない。

文様：内面は体部中位に連珠文を配し、外面は口縁部に多重界線を廻らし、胴部下位は繩簾文で埋める。

焼成：不良。

備考：KM28 に準ずる器形・法量であると思われる。

KM 30：粉青印花菊文碗

残存部位：体部上位～下位

胎土：灰色 (7.5Y6/1)。やや粗。黒色細粒 2%。空隙 3%（轆轤方向に細長い）。

成形：体部下位は丸く張り、上位は緩やかに外反する。

釉調：灰白～浅黄色 (7.5Y7/2.5)。半透明で内外面 1～2 mm 単位の貫入あり、気泡は極少ない。

文様：内面見込み周囲は菊文で、三重圏線を挟んだ上位には繩簾文で区画を埋める。外面は腰部に界線を廻らし、上位は菊文で埋める。

焼成：やや不良。

KM 31：粉青印花菊文碗

残存部位：口縁～体部下位

口径：19.1 cm 現存高：6.3 cm

胎土：灰白～灰色 (5Y6.5/1)。粗雑。赤褐色細粒 1%。空隙 1%。

成形：体部下位から丸味を帯びて内弯し、上位ではやや外反

し、端部は小さな玉縁状に成形する。器面の削りは粗い。
 釉調：浅黄～にぶい黄色 (2.5Y6.5/4)。酸化強く、発色は悪い。
 半透明で全面に1mm単位の貫入あり、気泡多い。
 文様：内面は体部中位を菊文で埋め、上下を多重界線で区画する。外面は無文。
 焼成：酸化、不良。

KM 32：粉青印花菊文碗「花三嶋（窯変）碗」

残存部位：口縁～体部下位
 口径：(11.1 cm (歪み大きい)) 現存高：8.1 cm
 胎土：灰色 (5Y5.5/1)。粗雑。赤褐色細粒1%。空隙2%。
 成形：体部下位は丸味を帯びて内弯し、口縁部では外反し、やや玉縁状に収める。外面の削りは粗い。
 釉調：淡黄～浅黄色 (7.5Y7.5/3)。半透明で外面は1～2mm単位の貫入あり、気泡多い。内面は象嵌に沿って貫入あり。気泡は少ない。
 文様：内面は体部中位を縄簾文で埋め、上下を多重界線で区画する。外面は無文。
 焼成：不良。

KM 33：粉青鉄絵牡丹文依壺○

残存部位：胴部中位
 胴径：(約 22 cm)
 胎土：灰白色 (7.5Y7/1)。粗雑。黒色細粒2%。空隙3%。内面露胎部は褐～暗褐色 (10YR3.5/4)。
 釉調：明緑灰色 (7.5GY8/1)。透明で全面に1～3mmの貫入あり、気泡はやや少ない。白化粧の後、草花文を鉄釉 (灰オリーブ色 (7.5YR4/2)) で施し、上釉掛けを行う。
 文様：鉄絵により牡丹文を大きく描く。
 焼成：不良。
 備考：内面は露胎で強い轆轤目を有し、白化粧の刷毛目が一定方向ではなく、横位と縦位に見られるため依壺 (チャングン) の一部であると思われる。

KM 34：粉青鉄象嵌草文壺

残存部位：胴部下位
 胎土：灰白色 (N8/0)。粗。黒色細粒1%。空隙2%。
 釉調：灰白色 (5GY8/1)。陰刻の後、鉄土を象嵌し上釉掛けを行っている。化粧土は確認できない。半透明で外面は極薄く、内面は1mm以下の細かい貫入あり、気泡はやや多い。
 文様：鉄象嵌による草葉文が確認される。
 焼成：やや不良。
 備考：文様部分は黒褐色 (7.5YR2/2) で、ガラス質化が見られないこと、塗り込まれた文様部分にも鉄物粒が確認されることから、鉄釉ではなく鉄分を多く含む土を象嵌しているものと思われる。

KM 35：粉青鉄絵草花文? 壺

残存部位：胴部中位
 胎土：外面側は灰色 (N5/0)、内面側は灰褐～黒褐色 (7.5YR3.5/2)。黒色細粒1%。白色細粒3%。空隙2%。
 釉調：灰白色 (5GY8/1)。白化粧の後、鉄絵 (オリーブ黒色 (7.5Y2/2)) を描き、透明に近い上釉掛けを行っている。全体に薄く、実質的に透明に近い。全体に1mm単位の貫入あり、気泡は少ない。
 文様：鉄絵により草葉の一部と思われる文様が見られる。
 焼成：良。

KM36：龍泉窯青磁鎊蓮弁文碗

残存部位：高台～体部中位
 現存高：3.5 cm 高台径：5.2 cm
 胎土：灰白色 (10Y8/1)。やや粗。黒色細粒1%未満。空隙2%。
 成形：高台は角高台で、疊付の外側端部を僅かに斜めに削る。
 釉調：明灰緑色。半透明で貫入無く、気泡多い。高台疊付外側端部まで施釉。
 文様：内面は見込みの圏線内に蓮華文の陰印判を施す。外面は鎊を有する蓮弁を配する。
 焼成：良好。
 備考：見込みには明瞭な使用痕 (擦痕) が見られる。

KM37：龍泉窯青磁鎊蓮弁文碗

残存部位：口縁～体部下位
 胎土：白色。精良。空隙1%。
 釉調：明灰緑色。半透明で貫入無く、気泡多い。
 文様：外面に鎊を有する蓮弁文を配する。
 焼成：良好。
 備考：素地は精良で釉の発色は良く、所謂「砧青磁」に該当する。

KM38：龍泉窯青磁鎊蓮弁文小碗

残存部位：高台～体部中位
 器高：3.2 cm 高台径：4.3 cm
 胎土：灰白色 (N8/0)。やや粗。黒色細粒1%未満。空隙2%。
 成形：角高台であるが、疊付の外側端部は僅かに斜めに削る。
 釉調：オリーブ灰色 (10Y5.5/2)。半透明で貫入無く、気泡多い。高台外面まで施釉する。
 焼成：良好。
 備考：見込みには僅かに擦痕が観察される。

KM39：龍泉窯青磁蓮弁文皿

残存部位：口縁～高台
 口径：13.0 cm 器高：3.8 cm 高台径 5.4 cm
 胎土：灰白色 (N8/0)。精良。黒色細粒1%未満。空隙1%。

成形：高台は細く尖り、壘付の幅は2mm。丸味を持って立ち上がり、口縁部は水平に屈曲し、端部は上方に僅かにつまみ上げる。

釉調：明灰緑色。半透明で貫入無く、気泡多い。全面施釉後に壘付の釉を削るが高台部内側の一部は元々釉が達していない。

文様：内面腹部に丸彫りにより鐫文を施す。

焼成：良好。

KM40：龍泉窯青磁鐫蓮弁文碗

残存部位：口縁部

口径：15.2 cm 器高：4.0 cm 高台径：5.4 cm

胎土：灰白色(5Y7.5/8)。やや粗。赤褐色細粒1%未満。空隙1%。

釉調：オリーブ黄色～灰オリーブ色(5Y5.5/3)。半透明で内外面2～3mm単位の貫入あり、気泡はやや少ない。

文様：外面に鐫蓮弁文を施す。

焼成：やや酸化気味で不良。

KM41・45：景德鎮窯青白磁碗

残存部位：口縁～高台

口径：13.8 cm 器高：4.4 cm 高台径：3.4 cm

胎土：白色。精良で混入物なし。空隙1%未満。

成形：壘付は僅かに尖るか、あるいは幅1mmの平坦面を持ち極めて細い。高台内は平坦であるが、高台際のみ僅かに斜めに削り込む。底部は厚さ6mm、体部は下位でも厚さ3mmと全体に極めて薄作りである。胴部下位は極僅かに丸味を持ち内弯するが、中位では直線的に立ち上がり、口縁部は僅かに端反り気味の口縁となる。内面口縁部付近に僅かにカンナ削りが観察される。

釉調：明緑灰色(10GY8/1)。半透明で貫入無く、気泡はやや多い。高台部まで施釉後、壘付から高台内を削りだす。

文様：見込みに小さな鏡面を持ち、内面腹部の3箇所には陰刻により3つの草花文を施す。焼成：良好

KM42・43：褐釉陶器耳付壺

残存部位：胴部中位

現存高：6.2 cm 胴径：11.2 cm

胎土：にぶい黄橙～明黄褐色(10YR7/5)。粗。褐色細粒2%。白色細粒3%。空隙1%。

成形：胴部上位に縦位あるいは横位の耳の端部が遺存する。

釉調：外面は黒色(10YR7/1)。不透明で全体に1mm以下の細かい貫入あり、気泡多い。全面に1mm以下の鉄斑文が浮かび出る。内面は褐色(7.5YR4/5)の薄い釉が、破片範囲の全面に施釉される。

焼成：良好。

KM 44：黒釉小碗

残存部位：高台～胴部下位

胎土：灰白色(7.5Y7/1)。粗。黒色細粒1%。空隙5%。

釉調：外面は黒色(5Y2/1)。不透明で3～5mm単位の貫入あり、気泡はやや少ない。内面はオリーブ黄～オリーブ灰色(8.75Y6/3)。半透明で3～10mm単位の貫入あり、気泡はやや少ない。外面の一部にも内面と同様の釉調が見られるが、釉層の重なりは確認できず、焼成時のむらによる発色の違いであるものと思われる。

焼成：良好。

備考：内面には明瞭な轆轤痕などが見られないため袋ものではなく、小碗である可能性が高い。